

# エックハルト『ヨハネ福音書注解』における始原論

中山 善 樹

1 エックハルトのラテン文テキスト全体を通覧してみると、エックハルトが或る場合には、「存在」(esse)は神であることを強調し、或る場合には、神は「知性」(intellectus)ないし「知性認識」(intelligere)であって、存在ではないことを強調していることに当惑させられる<sup>1)</sup>。確かに、存在も知性ないし知性認識も、いずれもエックハルトの根本概念であることには変わりがないが、エックハルトのラテン文テキストの内部に限定しても、少なくとも表面的には、それらの両者の関係は判然としない<sup>2)</sup>。そのような問題状況において、第三の根本概念として、場合によっては、それら両者の関係を新たな視角から照射するものとして、「始原」(principium)なる概念が注目され始めた<sup>3)</sup>。モイスィシュ(Burkhard Mojsisch)によると、エックハルトの形而上学は第一次的には、「存在」の形而上学ではなく、「始原」の形而上学であるとさえ言われる<sup>4)</sup>。いずれにしても、このことを確証するためには、始原概念が頻出する重要なテキストである『ヨハネ福音書注解』(*Expositio s. evangelii sec. Iohannem*)におけるそれが、可能なかぎりテキストに密着して、解釈されなくてはならない。

2 エックハルトの『ヨハネ福音書注解』によれば、『ヨハネ福音書』の冒頭において「初めに言があった」(In principio erat verbum) (1, 1)と言われる際の「初め」すなわち「始原」(principium)とは、まず第一に、「理念」(ratio)である。エックハルトによれば、発出するものは産み出すものうちにおいては理念として存在するのであり、その理念のうちでは、あるいはその理念をとおして、産み出されるものは産み出すものから発出するのである<sup>5)</sup>。これらはもろもろの事物に先立つ理念であり、もろもろの事物の原因であり、それは定義が告知する理念であって、その理念

はもろもろの事物の第一の原因であり、その理念を知性が把握するのである。このようにして、産み出されたもの、ないしは或るものから産み出すものは、神的なものうちに先在しているのである。エックハルトが好んで挙げる例を挙げれば、「義人」(justus)はその「義」(justitia)によって、義人なのであって、義はけっして義人から後になって抽象されたものではない。義は義人に存在論的に先行するのであり、その点において義人に比して、存在論的優位を保持している。

また発出するものは産み出すものの「子」(filius)である。子とは、本性において異なるものではなく、ペルソナにおいて他なるものである。産み出されたものは、始原のうちにあるかぎり、本性において異なるものではなく、基体において異なるものでもない。エックハルトが用いている例を挙げれば、職人の精神のなかにある箱は、まだ箱ではなく、職人の生命であり、知性認識であって、その現勢的観念である<sup>6)</sup>。このことは、また換言すれば、「言」(verbum)は始原の実体そのものであり、「始原において言があった」(In principio erat verbum)と言われていることから明らかのように、それが過去であるがゆえに、それはたえず産まれてしまっているものであり、それが未完了であるがゆえに、それはたえず産まれるのである。このようにして始原はまた、子であるとともに、言をも意味し、アウグスティヌスが『三位一体論』において言うように、すべての生ける不可変的なもろもろの理念によって満たされた、或る種の知であり、その知のうちでは、すべての理念が一なるものとなっているのである<sup>7)</sup>。そこには、もはやもろもろの事物のもろもろの理念が併存しているのではなく、一なる根源的な知、すなわち理念が子、言として現存しているのである。エックハルトが好む先の譬えを挙げれば、義人は義の言であるとともに子であり、その言ないし子をとおして、義はそれ自身を言い表し、明らかにしているのである。

3 第二に、エックハルトによれば、始原は知性ないしは知性認識として捉えられる。始原と知性との密接な関係は、始原が理念であるとされていることから、すでに明らかであろう。理念はほかならぬ知性によって把握されるものであるからである。知性の固有性は、知性認識されうるものを、それ自らの始原において把握するところに存する。エックハルトによれば、もろもろの事物のすべての認識はその始原をとおして、その始原において成立しているのであり、認識がその始原のうちに還元されるまでは、認識そのものはたえず覆われたものであり、暗いものである<sup>8)</sup>。知性は神に

において最大限に、そしておそらく万物の第一の始原としての神そのもののうちではその全体において、その本質によって、知性であり、純粹の知性認識である。しかもエックハルトによれば、そのうちにおいてロゴスが、理念が存在している始原は、知性として、その結果をよりいっそう高貴な仕方であらかじめ有している本質的に働くものであり、その結果の原因性がすべての種を超えているようなものである<sup>9)</sup>。

ここでエックハルトは注目すべき「本質的始原」(principium essentiale) 論を展開している<sup>10)</sup>。本質的始原の「自然的条件」(conditio naturalis) は、エックハルトによれば、以下のようなものである。第一の条件は、本質的始原のうちには、結果が原因のうちに含まれているように、その始原から生じたものが含まれている<sup>11)</sup>。第二の条件は、その始原から生じたものは、その原因、すなわち本質的始原のうちにとだけ存在しているのみならず、先在しているのであり、それがそれ自身において存在しているよりも、より卓越した仕方では存在しているのである<sup>12)</sup>。第三の条件は、その始原そのものは、つねに純粹な知性であり、その知性の中には、知性認識以外の他の存在は存しないのであり、その純粹の知性はいかなるものとも共通のものを持たないのである<sup>13)</sup>。第四の条件は、始原そのものにおいては、また始原そのもののもとにおいては、結果はその潜勢力において始原と同時的に存在している<sup>14)</sup>。

エックハルトによれば、理念は知性のうちにあり、知性認識することによって形成されており、知性認識そのものに他ならないのである<sup>15)</sup>。すなわち理念は、本質的原因論の第四の条件からして、その潜勢力において知性と同時的である。理念は知性認識そのものであり、知性そのものであるからである。それゆえに、本質的始原論の第三の条件において、始原そのものは、端的に、純粹な知性であるとされているのである。そしてこの知性ないし知性認識のうちに始原の存在論的規定を求めている点において、エックハルトは、その本質的始原論を、モイスイシュによれば、エックハルトのドミニコ会における直接の上長でもあり、当時、著名な思想家であったディートリッヒ・フォン・フライベルク (Dietrich von Freiberg) の「本質的原因」(causa essentialis) 論から継承しているのであり、アルベルトゥス・マグヌスの系譜に連なるものであるとされている<sup>16)</sup>。

4 しかしながら、テキストを検討してみると、エックハルトは第三に、そして究極的には、始原を存在として捉える。そしてこの把握は、エックハルトにとって、前

二者の把握よりも、より包括的で根源的なものであった。エックハルトによれば、すでに述べられたように、子は父においては、言すなわち理念であり、それは生じたものではないが、その同じ子が、世界のうちにおいては、もはや言ないし理念あるいは認識する知性の属性の下においてではなく、存在の属性の下において存するのである<sup>17)</sup>。すべての働きは、より真なる、かつより高貴なる存在を、その原因のうちに有しており、第一の原因である始原のうちにおいてのみ、すなわち神のうちにおいてのみ、「絶対的にして端的な存在」(esse absolute et simpliciter) を有しているのである。この世界のうちのすべての原因においては、結果は原因のうちに「これこれしかじかの存在」(esse hoc vel hoc) を有しているであり、その意味では神以外のすべての原因は「これこれしかじかの存在者」(ens hoc vel hoc) であるが、それらは「端的な意味における存在」(esse simpliciter) としての神のうちでのみ、「絶対的にして端的な存在」を持つのである<sup>18)</sup>。

さらにエックハルトによれば、神と神的なものであるかぎりでのすべての神的なものには、内に存在するということと最も内奥に存在するということが属するのである<sup>19)</sup>。世界に向かっての神の第一の働きは、存在であるが、存在はそれ自体としては、すべてのもののうちで最も内奥のものである。その最も内奥のものが世界との関係において現れるとき、存在として現れるのである。存在はそれ自体としては、理念よりも、知性よりも、内奥のものであり、それらすべての存在者にとって、より包括的で、根源的なものである。エックハルトにとって、そのような存在概念は、本来的な意味における始原に最も相応しいものである。

5 エックハルトは、すでに他の拙論において示したように、その『創世記注解』(*Expositio Libri Genesis*) において、『創世記』の冒頭における「初めに神は天と在とを造られた」(In principio creavit deus caelum et terram) (1, 1) というアウクトリタスを解釈して、やはり同様に、始原を、その思惟の深まりに応じて、第一には、「イデア的理念」(ratio idealis) として、第二には、「知性的存在」(natura intellectus) として、第三には、「永遠の第一の単一の今」(primum nunc simplex aeternitatis) として、第四には、そして究極的には、「存在」(esse) として捉えている<sup>20)</sup>。このことからエックハルトは『創世記』と『ヨハネ福音書』を同一の観点から、なしうるかぎり整合的に解釈しようとしていることが明らかになるであろう。また聖

書の旧約と新約の異なった二つのアウトリタスのうちに、形而上学的意味において何の相違も認めていない<sup>21)</sup>。エックハルトにとっては、『ヨハネ福音書注解』の注解の方法論を述べた最初の部分において明らかにされているように、それらの聖書の言葉のなしうるかぎり哲学的な解釈が問題であったのであり、「哲学者たちの自然的論証」(rationes naturales philosophorum)によって、それらの言葉を基礎づけることが問題であったのである<sup>22)</sup>。そして小論において素描したように、知性ではなく、存在のうちに、始原の第一の、最も根源的な規定を求める点において、筆者には、エックハルトはディートリッヒともアルベルトゥスとも異なっており、むしろ根本においては、トマスの系譜に連なるもののように思われるのである<sup>23)</sup>。しかしこのことは、すでに素描したように、エックハルトの存在の思索がトマスの存在論の全面的受容であることを意味しない。むしろトマスの存在論とは、別の質の存在の思索が展開されている可能性もあるのである<sup>24)</sup>。始原論を探究することによってこのことはわれわれに対してよりいっそう明瞭になってきたと思われる。しかしエックハルトの存在論については、稿を改めてより詳細に論じなければならない。

### 註

- 1) 前者の代表的な例としては、*Prologus generalis in opus tripartitum*, n. 12: *Esse est deus*. 後者の代表的な例としては、*Quaestiones Parisienses*, q. 1 n. 4: *deus, qui est creator et non creabilis, est intellectus et intelligere et non ens vel esse*. しかしこれらの一見すると背反する命題は、たとえ同一のテキストの内部においてであっても、ラテン文テキストの随所に見られる。例えば、*Expositio Libri Genesis*, n. 11: *natura dei est intellectus*; n. 114: *deus esse est*.
- 2) 存在と知性認識ないし思惟をめぐる、このような問題連関は、エックハルトに固有のものではなく、哲学と哲学的神学の歴史においては、パルメニデス以来の根本問題であるとされている (W. Beierwaltes, *Platonismus und Idealismus*, Frankfurt/M 1972, S. 51).
- 3) エックハルトの「始原」概念に関するモノグラフィーとしては、以下が挙げられる。E. Waldschütz: *Denken und Erfahren des Grundes—Zur philosophischen Deutung Meister Eckharts*, Wien 1989. 本書において、ヴァルトシュッツは、中高ドイツ文テキストにおける“grunt”とラテン文テキストにおける“principium”とが対応することを主張している。本書については、後続の拙評を参照されたい。最近のエックハルト研究において始原概念が注目されていることについては、拙論「エックハルト研究の新しい動向」、『中世思想研究』第 XXXII

号, 190—199頁参照.

- 4) Burkhard Mojsisch: *Meister Eckhart, Analogie, Univozität und Einheit*, Hamburg 1983, S. 141 参照.
- 5) 以下, エックハルト『ヨハネ福音書注解』のテキストは, Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, Stuttgart 1936ff., *Die lateinischen Werke Bd. III, Expositio s. Evangelii sec. Iohannem*, herausgegeben von Karl Christ, Bruno Decker, Josef Koch, Heribert Fischer und Albert Zimmermann S. 1-650 を使用した. *Ibid.*, n. 4: quod (procedens) est in ipso ut ratio, in qua et per quam procedit quod producitur a producente.
- 6) *Ibid.*, n. 6: Arca enim in mente artificis non est arca, sed est vita et intelligere artificis, ipsius conceptio actualis.
- 7) Augustinus, *De trinitate*, VI, c. 10 n. 11, PL 42, 931: tanquam Verbum perfectum, cui non desit aliquid, et ars quaedam omnipotentis atque sapientis Dei, plena omnium rationum viventium incommutabilium; et omnes unum in ea, sicut ipsa unum de uno, cum quo unum.
- 8) Eckhart, *op. cit.*, n. 20: Omnis enim cognitio rerum est per sua principia et in suis principiis; et quousque resolvatur in sua principia, semper obscura, tenebrosa et opaca est.
- 9) *Ibid.*, n. 31: Et tale agens, principium scilicet in quo est logos, ratio, est agens essentielle nobiliori modo prae habens suum effectum, et est habens causalitatem super totam speciem sui effectus.
- 10) ここで「本質的始原」(principium essenziale) と訳した「本質的」(essentielle) とは, ヴァルトシュッツによれば, 「存在的」(seinsmäßig) ないし「存在賦与的」(seinsgebend) という意味において解釈されなくてはならない. そのように理解することによって, 本論の後続の議論とよりいっそう適合するようになるであろう (Waldschütz, a. a. O. S. 235).
- 11) *Ibid.*, n. 38: Prima, quod in ipso contineatur suum principiatum sicut effectus in causa.
- 12) *Ibid.* : Secunda, quod in ipsa non solum sit, sed etiam praesit et eminentius sit suum principiatum quam illud in se ipso.
- 13) *Ibid.* : Tertia, quod ipsum principium semper est intellectus purus, in quo non sit aliud esse quam intelligere, nihilo nihil habens commune.
- 14) *Ibid.* : Quarta condicio, quod in ipso et apud ipsum principium sit effectus virtute coevus principio.
- 15) *Ibid.* : ratio in intellectu est, intelligendo formatur, nihil praeter intelligere est.

- 16) Mojsisch, a. a. O. S. 21-29.
- 17) Eckhart, *op. cit.*, n. 44: *filius in patre est verbum, id est ratio, quae non facta est; sed ipse idem filius in mundo est non iam sub proprietate verbi sive rationis et intellectus cognoscentis, sed sub proprietate esse.*
- 18) アルバート (K. Albert) によれば、「存在」(esse) と「これこれしかじかの存在」(esse hoc et hoc) との区別は、エックハルトの哲学の根本思想である (Karl Albert: 'Der philosophische Grundgedanke Meister Eckharts', in: *Tijdschrift voor Filosofie* 27 (1965), S. 320-339; *Meister Eckharts These vom Sein, Untersuchungen zur Metaphysik des Opus tripartitum*, Kastellaun/Saarbrücken 1976, S. 13). しかしフィッシャー (H. Fischer) は、この区別がエックハルトの教説の前提であることは認めながらも、それがアウグスティヌス、ポエティウス、偽ディオニシウスの伝統に遡及するものであり、トマスの『スンマ』第1部第3問第6項ならびに第4問第2項にもその思想は見出されるとしている (Heribert Fischer: 'Die theologische Arbeitsweise Meister Eckharts', in *Miscellanea Mediaevalia*, Bd. 7, 1970, S. 57).
- 19) Eckhart, *op. cit.*, n. 34: *dei et divinorum omnium, in quantum divina sunt, est inesse et intimum esse.*
- 20) 拙論、「エックハルト『創世紀注解』における始原論」、『中世哲学研究』第9号、52-59頁参照。
- 21) Waldschütz, a. a. O. S. 216 参照。
- 22) Eckhart, *op. cit.*, n. 24: *In cuius verbi expositione et aliorum quae sequuntur, intentio est auctoris, sicut et in omnibus suis editionibus, ea quae sacra asserit fides christiana et utriusque testamenti scriptura, exponere per rationes naturales philosophorum.*
- 23) エックハルトは、始原の第一の規定を存在のうちに探究する点において、新プラトン主義的なもろもろの潮流とは、異なっている (Waldschütz, a. a. O. S. 271f.). なおエックハルトの哲学の根底に、トマスから影響を受けたと思われる「存在」の思想が見られることは、以下を参照されたい。K. リーゼンフーバー、「神秘主義としての精神論——マイスター・エックハルトの思想の根本構造——」、『中世における自由と超越』(創文社、1988年)、545-558頁。
- 24) コッホによれば、エックハルトはけっしてトミストではない。エックハルトにおいては、新プラトン主義的なアウグスティヌスの思惟様態が、アリストテレスのトマスの思惟様態に対して優位を占めている (Josef Koch: 'Meister Eckhart, Versuch eines Gesamtbildes', in *Kleine Schriften*, Bd. 1, Rom 1973, S. 213: *Es wäre aber ganz abwegig, in Eckhart einen Thomisten zu sehen. Je mehr man sich mit ihm beschäftigt, um so deutlicher wird vielmehr etwas andere, dass*

nämlich die neuplatonisch-augustinische Denkweise durchaus vor der aristotelisch-thomistischen den Vorrang hat. Das hindert ihn freilich nicht, in aristotelisch-thomistischen Formeln zu reden, wie wir das auch bei manchen seiner Zeitgenossen beobachten können).